



華^{はな}くれなるの梅の実ひとつ白粥のなか
くぼませて載するよろしさ

咲かざりし白曼珠沙華をなじりしに青
々と冬の葉のこぞり立つ

のれんに腕押しと言はる。消極にても
ろき受身の暖^{のうれん}簾われを

上昇するエレベーターに思ひなく手を
垂れて立つ密室ケージ

枕替へて邯鄲の夢など見まほしき、一
睡といへど楽しくあらむ



ふるさとコレクション——167

じんふうかく
仁風閣（鳥取県鳥取市）

この建物は明治40年5月、時の皇太子（のちの大正天皇）の山陰行啓に際しご宿舎としても鳥取藩主池田仲博侯爵によって建てられたフレンチルネッサンス様式を基調とした木造二階建の本格的洋風建築で、中国地方屈指の明治建築として著名である。

設計は赤坂離宮の設計家として有名な片山東熊博士によるものと伝えられ、鳥取市出身の橋本平蔵が補佐し地元の工匠浜田芳蔵が施行にあたった。楕形ベディメントを主要なモチーフにした端正な正面のたたずまいに屋上の棟飾りや階段室の八角尖頭屋根が変化を与え、背面一・二階吹抜けのバルコニーは軽快で美しい構成を示している。

内部は御座所・謁見所・御食堂の主要室をはじめとして一・二階の各室とも室内装飾に意が払われ、マントルピース・カーテンボックス・シャンデリアなどの細部意匠にも見るべきものが多い。

皇太子到着の当日に県下で初めて電灯が点されるなど文明開化を華々しくうたいあげた記念建築でもある。「仁風閣」の名は、行啓に随行した海軍大将東郷平八郎によって命名されたものである。

（写真・解説 平尾 潤子）

口絵鑑賞 感情の豊かさ

「華くれなゐ」五首中の五首。一首目。初、二句の表現の美しさが際立つ。梅干しとは言わないのである。また、色彩と共に、梅の実の載った白粥がはっきりと浮かんで来て、食を喜ぶ様子がわかる。二首目。楽しみにしていた白曼珠沙華の花が咲かなかった。その落胆ぶりが三句目の強い言葉に表れている。別名「葉見ず花見ず」と言われる通り、花が終ると葉が出てくる。つまり、花が咲かなくても、葉は叢生して来たのである。下句にはその様子に思いがけなさとしの安堵感がうかがえる。

三首目。意外なことを言われたという思いが強く出ている。句点があり、一瞬考える間となる。そして、自身の負の部分と、さらに「のうれん」と言うことで、軽くないなしている様子を感じる。四首目。「上昇する」と言い、「密室」と危ぶみながら、エレベーターの中に無言、無防備に立つ作者が浮かぶ。五首目。「枕中記」を踏まえての一首。作者の粋で素直な心意気が表れている。

五首全てに感じるのは、その時々感情の豊かさと素直さである。

(写真・木畑 紀子 鑑賞・能勢 玉枝)